
少女少食、美味礼賛

月月もも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女少食、美味礼賛

【Nコード】

N8532X

【作者名】

月月もも

【あらすじ】

少女は六十九億六千七百八十二万三千五百五十五人の死体を食べきった。

胸焼け

——平成二十三年の十月一日は酷い胸焼けから始まる。

「……お腹が減るとは、一体どのような感覚なのですか？」

中華そば、焼き飯、焼き餃子、小籠包、麻婆豆腐、八宝菜。

眼前の円形テーブルに所狭しと並ぶ人食。過多に脂ぎった其れらをまず視覚が捉える。次いで視覚から送られた情報を脳が処理するわけが、どうやら其処で異常が出た様だ。

——吐き気がする。

空っぽの胃の中で、胃液が緩やかに流動している。

そして、じわじわと管を通り昇り始めている。

全ては目の前の人食が原因なのだ。

少し肌寒い室内に揺ら揺らと立ち昇る湯気。

それが一つなら問題なかった、と思う。

だけれど、湯気はテーブルから六つ立ち昇っている。

過多だ。

やはり、過多なのだ。

いや、それが中華料理でなければまた違っていたのかも知れない。だけれど、此処は中華料理店で、並んでいるのは中華料理ではない。

目を背けたい現状である。

しかし、何処に目を背けても、周囲の景色は差して変わらない。

揺ら揺らと、周りからも湯気が立ち昇っているのだから。

湯気と連動して、胃液がまた少し昇る。

視覚が捉えた情報で、脳が圧迫されている。

いや、これは強迫観念だ。異常なのは脳ではない。異常なのは、私の精神の方だ。

だがしかし、私の異常が格別に存在すると云うわけでは無いだろう。

これはある種の、酔い、だ。

乗り物に、酔う、のと同じ、酔い、だ。

私は、料理に、酔った、のだ。

だから吐き気がする。

だけれど、異常なのは脳ではない。

これは、強迫観念でしかないのだから。

この場所から、一步外へと出た事を考える。

恐らく、酔いは、収まるだろう。

だって、強迫観念を生み出した視覚が、強迫観念の元を捉えなくなるのだから。

だから、これは脳の異常ではない。精神の異常なのだ。

いや、精神が脳を圧迫しているのだから、やはり、脳の異常でもあるのかも知れない。

とにかく、何にせよ。

……酔った。

「どの様な感覚ってか？ そりゃ勿論、お腹が減るって感覚だ」

視界を元の位置へ戻すと、割り箸の先で二つに裂かれた小籠包から揺ら揺らと新たな湯気が立ち昇っていた。

「……ですから、その感覚がどの様なものなのか、とお聞きしているのです」

「だから、お腹が減るって感覚だ」

繰り返し。変化無し。

彼女は自身が裂いた小籠包の片割れを口に入れた。冷まさず、一口で、入れた。

「……味が、落ちたな」

知った事ではない。

私は今日が初めてなのだ。そして、恐らく、これから、初めてなのは変わらないのだ。

「それで、キミは本当に食べないのかい？」

「……ええ、私はお腹が減りませんから」

だけれど、胃液は唸る。

既に食道の入り口近くまで昇って来ている。

「でも、全く食べないというわけでは無いのだろうか？」

彼女の次の獲物は中華そば。

成人、とはいえ、その一掴みの麺の量は女性の枠を超えている様に思える。

ずずず、と、品の無い音が響いた。

「そうですね、必要最低限には食べないと身体が動きません」

「動かなくなるだけ？」

「……失礼、対象が私ならば、その言葉は些か曖昧でしたね。一切養分を摂らなければ私も貴女方と同じ様に、餓死します」

「うん、それを聞いて安心した」

何が安心なのだ。

「でも、昨日から何も食べてないけど、大丈夫か？」

ずずず。

彼女に勢い良く啜られる麺が、纏った汁を周囲に飛散させる。

「問題ありません。私は——少食、ですから」

「そうかい。なら安心だ」

だから、何が安心なのだ。

「……それにしても、貴女は些か食べ過ぎではありませんか？」

いけない、またもテーブルの上を見てしまった。もう『ギリギリ』
なのに。

——ごくり。

唾液を使い強引に『押し戻した』が、限界は近い。

「食べ過ぎ、か。何事も過ぎるという行為は良くない。だがしかし、それが『堪能』ならばどうだ？ 他者から見れば過ぎたる行為も、
当の本人にとってはそれが『満足』たる分量であれば、何も問題無い
のではないかね？ ああ、問題ない。あたしはこの量で『満足』
するのだから」

「……要するに、私にとっては多量であっても、貴女にとってはこ

れが適量だという事ですね？」

「その通り」

——気持ち悪い。早く此処から出たい。

「それに、あと『六日』しかないのだから、限られた時間の中で人間としての欲を出来るだけ満たしたいっていうのもあるのさ。だから今日は一日上手い物を食わせてくれる店を巡るぞ」

「……はい？」

「うん？ だから、『あと六日で人類は滅亡するのだから、死ぬ前に出来る限り欲望を満たしたい』と言っているんだ」

「それは昨日聞き及びましたが……本気で実行する気だったのですね」

呆れた。と、いうより惚けた。その大雑把な性根に。

「当然。あたしは言った事は絶対実行する。その性分は『死ぬまで貫き通すよ』」

会話しながらも彼女の食事は続く。皿は次々空になり、残りはそばと麻婆豆腐のみ。

「……人の三大欲。今日満たすのは『食欲』ですか」

「ああ、昨日は『性欲』を『満たさせて頂いた』からね、今日は胃袋を満たすよ」

「……」

ふと、昨日就寝場所に選んだホテルの一室を思い出した。

柔らかいベッドの上から見た白い天井。

熱を纏った下腹部と、それを指で弄ぶ彼女の温かい指の感触。

「……気持ち良かったかな？」

「……それについては語りません」

「あはは、恥ずかしいのかい？　可愛いね……ああ、キミの喘ぎ声
もとても可愛かったな」

「……」

「最初は戸惑いながら声を抑えていた様だけど、最後は大きな声を出してあたしの指と舌を求めてたものね。ああ、思い出ただけで
また濡れてきちゃうわ」

「……黙って食べてください」

「はいはい」

ずずず。言わずと知れた例の音。

暫しの沈黙の後、テーブルの皿を全て空にした彼女は『満足気』
な顔でまた口を動かす。

「ところでキミはあの『外道共』のところでは何て呼ばれていたんだい？」

「名、という事でしょうか？ それならば私に名はありません。あの場所で私は『型式D・02TH』、と呼ばれていましたが、しかしそれは名ではなく『彼等』の識別呼称です」

「……そっか。じゃあ、キミの『元の人間の名前』はわかるかい？」

「……ええ。私は記憶操作をされていません。ですからこの『身体』になる以前の記憶も全てそのまま持っています。そして、『以前の私の名』は——」

「——あさなぎ朝凧とわこ」

「……やはり、知っていましたか」

ぐび、と、彼女は空になった自分のお冷を遠ざけ、手付かずの私のお冷を一気に飲み干す。

「ああ、知っている。キミの『前後』の素性も何もかも」

「でしょうね」

「キミは昨日『あの場所』から見ず知らずのあたしに『攫われた』のに、何一つ聞かないのだね」

「ええ、私にとっては『どうでもいい事』ですから」

「そっか。……では六日後の『きよげん虚滅』をどう思っ？」

「……どうも思いません」

「あはは、それが『キミ』か。わかった、ではそろそろ行くつか」

彼女は席を立つ。

「……どちらに？」

「次は、ステーキ食べたい」

「……」

私も席を立つ。

そして、限界は訪れた。

「……申し訳ありません、お手洗いに行かせて頂きます」

胃液が、もう、そこまで。

「ああ了解」

彼女は私に目もくれずレジに向かう。

——が。最後に、呟いた。

「……他のお客さんの迷惑になるから、トイレでの自慰行為はほどほどに、な」

私は彼女への不満も怒りも、胃液と共に便器にすべて吐き出し、そして——平成二十三年の十月一日は酷い胸焼けから始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8532x/>

少女少食、美味礼賛

2011年11月12日08時31分発行